

千葉大教育

前島雅子

目的： 洗濯はよごれ除去を主な目的として実施されるが、実生活では更に衣服諸性能の復元と保持に留意した扱いが必要である。布地は一般に洗濯により収縮や風あい変化を生じ、その程度は布地の種類、処理方法や回数などによりさまざまである。洗濯した布地の風あいと空げき構造を調べることにより、好ましい扱い探究の一助としたい。

方法： (1)試布：綿変り織地、羊毛斜紋織地、羊毛編地。市販弱アルカリ性洗剤または中性洗剤を用い、繰返し20回までの洗濯機洗いをし、アイロン仕上げした。

(2)空げき構造：n-dodecane を用い平衡吸液法および遠心脱液法の実験結果から空げき量/径分布を求めた。
(3)風あい：原布との対比較判定を行った。

結果：20回までの繰返し洗濯により次の変化を見出した。

羊毛布：面積収縮と厚さ増加が著しく、大径（ 1000μ 付近）および中径（数 10μ 付近）の空げき量増加が大きい。小径（数 μ 以下）の変化は比較的少い。織地はなめらかさその他の風あい劣化が増大する。綿布：若干の収縮と厚さ増加が見られる。大径域空げき量の増加は洗濯10回以降は鈍化する。中径域（数 $10 \sim$ 数 100μ ）空げき量は増加するが、小径域での変化は少い。なめらかさ、やわらかさがやや減少し、白さが増大した。